【主題】　Agency を育む学び

【副題】　～つなげて深め合い高め合う～

【学校・団体名】福井市安居中学校
【役職名・氏名】校長　野坂　訓由

１　はじめに

本校は、県内で３校目となる「教科センター方式」の中学校で、「地域社会に新しい風を起こし、吹き込んでほしい」という願いが込められた「風のひろば」を中心とした円形の校舎となっている。積極的な異学年交流から生まれる主体的な活動が展開されることが企図されており、「社会参画型学力の育成」と「生徒が主役」を理念としている。

２　主題「Agency を育む学び」について

Agency とは OECD Education 2030 プロジェクトによって示された次世代の教育概念で、本校では「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義している。本研究では、子どもたちが自分の人生や社会がよりよいものになるような目標を設定し、友達、教師、家庭、地域の様々な人たちと力を合わせながら、最後まで責任をもって目標を達成する力、つまり、生徒 Agency の育成を目指した。また、教師においても、専門的な知識や技能を用いてカリキュラムを共同設計し、変革していく力、つまり、教師 Agency の育成も重視した。

３　副題「つなげて深め合い高め合う」について

研究主題を「Agency を育む学び」として以来、「共に創る」をキーワードとして、「ACS(Ago Community Session)」、「My Learning」、「各シーズンのプロジェクト学習」といった、本校独自の研究実践を積み重ねてきた。これらの活動をより効果的に展開するためには、生徒と教師、生徒と地域、生徒同士、教師同士、教師と地域など多様な相手との協働が不可欠である。令和５年度は、これまでの研究成果を生かしつつ、中学校３年間の学びを見通しながら１つ１つの活動を深めるために、副題を「つなげて深め合い高め合う」と設定した。そして、AAR サイクル〔Anticipation（見通し）、Action（行動）、Reflection（振り返り）〕を繰り返しながら研究実践を行った。

４ 研究の柱

生徒 Agency を育む取組

①各教科の授業、学校行事、総合的な学習の時間、部活動などすべての教育活動での学びを振り返って、異学年で語り合う「My Learning」を行い、学びを俯瞰して見る力や学びを次の活動に生かしていく力を高める。
②ACS(Ago Community Session)で各学年のプロジェクト学習の計画を語り合い、質問やアドバイスをし合うことで、プロジェクト学習の質と意識を高める。
③シーズンプロジェクト学習を展開し、生徒の主体性を高める。

- Summer Project：上級生のリーダーシップのもと、異学年の協働による学校祭に向けたプロジェクト
- Autumn Project：各学年でテーマを設定し、地域とつながり、地域に貢献するプロジェクト
- Winter Project：１年間の振り返りと、次年度の構想を立てるプロジェクト

④学年掲示板に学びの軌跡を可視化し、AAR サイクルを繰り返しながら修正していく力を高める。

教師 Agency を育む取組

①単元の構想を「プロジェクトシート」にまとめ、見通しをもち、単元を貫いた学習課題を設定する。
②「授業で目指す姿」を教室に掲示し、生徒主体の課題解決型の授業を展開する。
③教師間で授業参観を積極的に行い、生徒の学びを見取る力を高める。
④生徒の学びを見取りながら、適切な評価を生徒に返し、次の学びにつなげる。
⑤教科教室、学びのひろば、学びのみちなど、安居中学校の資源を活用し、特色ある空間をデザインする。

生徒と教師で共同 Agency を育む取組

①生徒と教師が共に授業研究会に参加し、生徒主体の授業づくりについて語り合う。
②生徒と教師が学校行事、学年行事の成果と課題を共有し、改善案を提案する。
③生徒と教師が「My Learning」で学びを語り合う。

５　令和５年度の研究活動の取組

１学期		２学期	
４月	・第１回研究会（７日） 「安居中学校の特色を生かした取組」 「令和５年度の研究の方向性」 ・第２回研究会（１９日） 「各部会の取組の方向性」	１０月	☆第１回My Learning（１１日） ・第１０回研究会（１７日） 「指導主事訪問の指導案検討」 「第１回My Learning を終えて」 ・第１１回研究会（２３日） 「公開研究会の提案授業についての指導案検討」 ・２学期指導主事訪問（３０日） ・第１２回研究会
５月	・第３回研究会（１０日） 「各教科の授業で目指す生徒の姿」 「各学年のプロジェクト学習についての見通し」 ・安居中学校区教育 合同研究推進委員会（１２日） ・第４回研究会（３１日） 「各教科のプロジェクトシート（１学期の単元構想）」 「各学年のプロジェクト学習についての見通し」	１１月	「各授業についての研究会」 ・第１３回研究会（１５日） 「公開研究会に向けて」 ・第１４回研究会（２１日） 「公開研究会に向けて」 ●公開研究会（２２日） ☆第２回My Learning　・・・・・・図1
６月	・第５回研究会（１５日） 「指導主事訪問の指導案検討」		・第１５回研究会 「提案授業の授業研究会」
７月	・１学期指導主事訪問（３日） ・第６回研究会 「提案授業の授業研究会」 ・第７回研究会（２６日） 「各教科のプロジェクトシート（成果）」 ・小中合同研究会（８日）	１２月	・第１６回研究会（６日） 「公開研究会を終えて」
		１月	・第１７回研究会（１０日） 「次年度の取組に向けて」
８月	・第８回研究会（２３日） 「各教科のプロジェクトシート（２学期の単元構想）」 ・第９回研究会（２５日）	２月	・第１８回研究会（８日） 「研究紀要（教科）」 ・第１９回研究会（２８日） 「研究紀要（プロジェクト）」
９月	「全国学力学習状況調査（国数英）の分析」	３月	☆第３回My Learning（１日） ●３年総合的な学習の成果発表会・・図2 ・第２０回研究会（６日） 「本年度の総括と次年度の取組に向けて」

図１　公開研究会でのMy Learningの様子

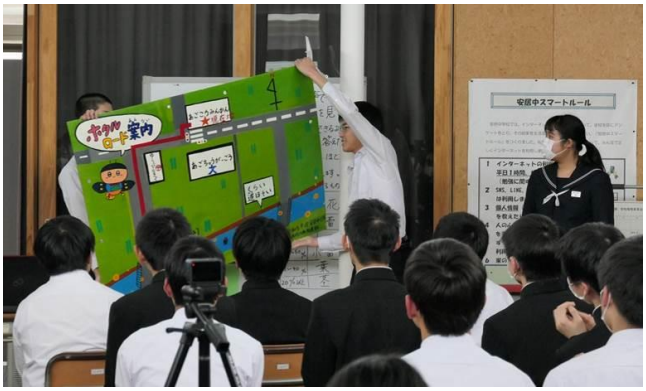

図２　３年総合的な学習の成果発表会の様子

６ 研究実践紹介

実践例１　環境保全プロジェクト
（令和５年度３年総合的な学習の取組）

３年生の「自然グループ」は、安居地区の自然や生物の保全を目的として、自分たちにできることを見いだすことをゴールに設定した。そもそも環境保全は、単年度で完了するものではないことから、持続可能な取組にはどのようなものがあるか、それをどのように実現していくべきかについて探究し、自分たちの調査結果を具体的な提言として後輩に託そうと考えた。次に、安居地区の自然を代表するホタルと絶滅危惧種のミズアオイに焦点をあて、フィールドワークを行ったり地域の環境保全団体「安居の里を守る会」と連携を図ったりして調査活動を行った（図3）。最後に、自分たちの思いが伝わるように工夫してプレゼン発表を行った（図4）。

図３　ホタル観察会の様子（左）

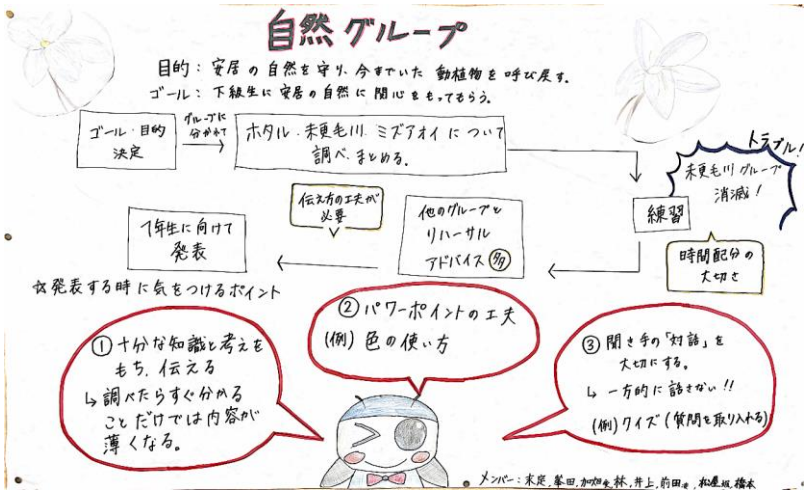

図４　プレゼン発表の資料（下）

実践例２　桜ライトアッププロジェクト
（令和５年度２年総合的な学習の取組）

２年生は、安居地区を活性化するために、「桜ライトアップ」に取り組んだ。まず、福井商工会議所青年部やエンゼルランドふくいを訪問し、ふくい桜まつりなどのイベントの企画・運営に関する話を聞き情報を集めた。次に安居公民館を訪問し、竹の加工に関する話を聞いた。これらを参考に、プロジェクト実現に向け必要な予算、材料、制作方法、制作期間について話し合った。その後、竹ライト制作指導者、ライトアップする桜の敷地の管理人の方、ライトの配線工事をしていただける地域の電気屋と交渉した。ライトのデザインについては、予算と作業の難易度も考え、どのようにすると効果的にアピールできるかを練り合いながら作成した。のこぎりで竹の節の間を切ったりドリルで穴あけたりする経験がなく、作業は難航したが最後まであきらめずにやり遂げた（図5）。令和６年４月に点灯会（図6）を行い、全員で大きな達成感を味わった。

３年に進級した生徒たちは、さらに地域活性化を拡大したいと考えた。令和５年度の経験をもとに計画を練り、令和６年８月の西安居地区の轟まつりでは、保育園児、小学生、地域の方を巻き込みながら、行灯によるライトアップを行い、祭りを盛り上げた。

図５　作業の様子

図６　点灯の様子

実践例３　数学プロジェクト学習（令和５年度２年生）

数学科では、「様々な課題を数学的に解釈して解決し、自ら数学を創ることができる生徒」を目指した。一次関数の利用では、**実践例２**の桜ライトアッププロジェクトと関連させ、竹で作った光源装置で地面に桜の形を映したいという生徒のアイデアをもとに単元を貫いた課題を設定した。光源をｙ軸の切片とし、光を一次関数の直線で表すと、ｘ軸との交点が地面に映る位置となる（**図７**）。一次関数を活用して、桜の形になるように式をつくり、竹の穴の大きさ、光源の高さを決めた（**図８**）。

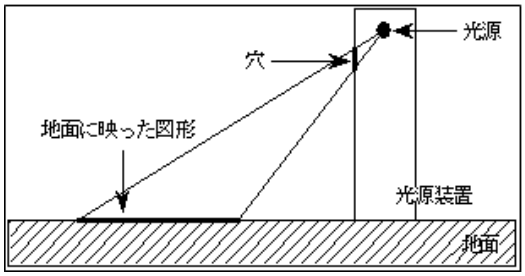

図７　課題のイメージ

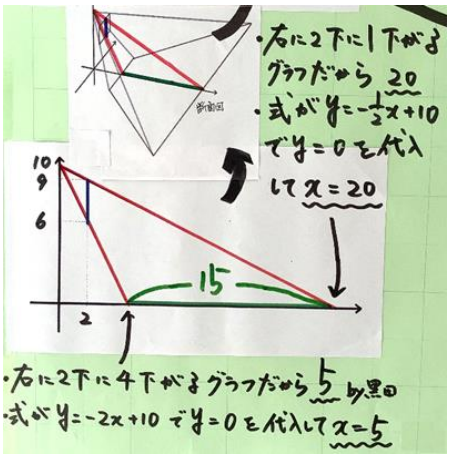

図８　生徒のワークシート

桜ライトアッププロジェクトを成功させたいという必然性がある課題設定は、生徒が主体的に解決しようとする意欲を高めることに非常に有効であった。また、生徒同士の話し合い、練り合いによって、対話的で深い学びになったと考えられる。

単元後の生徒の振り返り

- *実際に関数を使って計算し、それを実際に試して、本当に関数は使えるのだなと思った。形が円とかでも関数を使って計算できるのか興味がわいた。*
- *一次関数は先を予想するために勉強していると思いました。そして、予想は外れることもあるので、より適切な方法を探すためにも必要だと思いました。*

７　成果と課題

本研究では、研究主題「Agency を育む学び」のもと、つなげて深め合い高め合う活動を意識しながら研究実践を行ってきた。令和６年度全国学力・学習状況調査において、令和６年度３年生の数学の正答率は、**全国の 52.5%**に対して、**本校は 62.0%**と非常に高く、これまで生徒主体で行ってきたプロジェクト学習の成果であると考えられる。また、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。」という生徒質問に対して、「してみたい。」「どちらかと言えばしてみたい。」と答えた生徒の割合も、**全国の 76.1%**に対して、**本校は 94.4%**と極めて高く、生徒 Agency が育まれ、社会参画型学力の向上につながったためであると考えられる。

また、実践例には記載しなかったが、生徒と共に協議する授業研究会（**図９**）は、生徒と教師のそれぞれの考えを共有することができ、生徒と教師の共同 Agency を育む上で大変効果的だった。

今後の課題として、まずカリキュラムマネジメントが挙げられる。Agency を育むためには時間がかかるため、カリキュラムの焦点化を行い、十分な時間を確保する必要がある。次に組織マネジメントである。生徒の見通しが未熟で、途中で計画が進まなくなったり変更したりすることがしばしばあった。生徒の主体性や発意を重視しつつ、プロジェクト学習をコーディネートしていく本校の独特な取組は、現状においては教師 Agency に大きく依存している。管理職として、教師一人一人の能力が最大限に発揮され、チームとして最大の成果を出せるようなマネジメントをしていきたい。

図９　生徒と共に協議する授業研究会の様子

８　謝辞

本研究にあたり、安居公民館、安居の里を守る会をはじめとする地域の方々、また、福井大学連合教職大学院の先生方に、ご指導やご協力を賜りました。感謝申し上げます。